

MIYAZAWA Kenji in English — A Hard Fight of Faculty Development —

Miharu Nakamura*

Graduate School of Letters, Hokkaido University

宮澤賢治を英語で！ FD 苦闘記 — 名古屋大学セミナー参加報告 —

中村 三春**

北海道大学大学院文学研究科

Abstract — This paper reports a seminar in Nagoya University on August 30, 2010. I presented my experience of attending FD programs to teach classes using English in Hokkaido University in 2009. 1) The faculty development (FD) program for the Graduate School of Letters. We practiced teaching by microteaching. We saw our videotaped demo lessons and checked and improved our ways of teaching. 2) The Leiden University FD program. We learned various methods of FD in English in ICLON (Graduate School of Teaching), Leiden University. 3) Meeting toward a Bilingual University. We attended the meeting, and I presented a demo lesson on Miyazawa Kenji in English. Through the three programs I got some ideas about how to teach Japanese culture in English in my class.

(Revised on 13 September, 2010)

1. 「専門を英語で教える」セミナーについて

私は2010年8月30日(月)、名古屋大学高等教育研究センター・留学生センター主催により、名古屋大学東山キャンパス文系総合館カンファレンスホールで行われた、名古屋大学国際化拠点整備事業教授法研修「専門を英語で教える」に参加した。このセミナーは、英語による専門教育のカリキュラムの設計や授業の方法においてどのような工夫が必要なのかを報告し、専門を英語で授業するためのノウ

ハウと課題を共有することを目指すというものである(注1)。当日のプログラムは次の通りである。

「専門を英語で学べるカリキュラムづくり」

松本茂(立教大学経営学部教授)

「宮澤賢治を英語で！FD 苦闘記」

中村三春(北海道大学大学院文学研究科教授)

「英語による農学専門教育—農学部国際コース—」

緒方一夫(九州大学熱帯農学研究センター教授)

中村真子(九州大学農学研究員留学生担当講師)

*) Correspondence: Graduate School of Letters, Hokkaido University, Kita-10 Nishi-7 Kita-ku, Sapporo 060-0810, Japan

**) 連絡先: 060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学大学院文学研究科

このうち松本氏は、学部で推進されている BBL (バイリンガル・ビジネスリーダー・プログラム) の理念と実際について、また緒方・中村両氏は、英語による国際コース設置と、グローバル 30 によるその改革の加速について講演された。

私は、2009 年度に北海道大学で行われた英語による授業を行うための FD 事業 (以下、英語 FD) について、自分が参加した実体験を元に報告した。他の報告が、主としてカリキュラム設計に関わる組織的な取組についてであったのに対して、私は、英語とは縁遠い日本文学を専攻する教員が、英語による授業を担当することの困難と可能性に重点を置いた。日本関係の授業を英語で行うことは、大学教育を国際化する上で、一定のニーズが確実に生じているが、担当教員は英語が不得手であり、尻込みをするケースが多い。このような問題は多くの大学に共通に起こりつつあり、そのためか、私の報告に対する来場者からの反応は大きかった。以下、まず私の報告の要点を紹介する。

2. 「宮澤賢治を英語で！ FD 苦闘記」

2.1 なぜ私が！？……英語 FD とのなれそめ

何が悲しくて、英語のできない日本文学専攻の私が、英語 FD に加わることになったのか。私の専門

は日本近代文学等ですが、前任校の山形大学時代に、山形大学高等教育研究企画センター併任教授として、N Y 州立大学と山形大学との提携である YU-SUNY プロジェクトに携わりました。そこで英語による日本文学の授業 (教養教育) として、Modern Japanese Literature を担当し、「宮澤賢治から村上春樹まで」の内容で、講義を行ったのです。この講義は、都合 4 回実施し、それなりの成果がありましたが、反省点も多くありました。何よりも、十分な英会話能力がないので、lecture note を綿密に作らねばならず、それは 1 回の講義で平均 A4 判 17 ページ、1 学期では 200 ページにも及びました。また、自分が英語による授業を受けたことがないので、授業の進行や学生とのコミュニケーションに関わる英語表現がよく分からないのです。この辺を何とかしなければと思ううちに、北海道大学への異動がありました。

2.2 「大学教育の国際化加速プログラム」

2008 年 10 月に赴任した北大では、平成 20 年度採択の、文部科学省大学改革推進等補助金事業「大学教育の国際化加速プログラム (国際共同・連携支援 (総合戦略型))」により、海外の大学との単位互換、ダブルディグリー、エラスムス・ムンドゥスプログラムなどの推進のほか、英語による授業を充実するための教員サポートが実施されました。この教員サ



写真 1. 名古屋大学高等教育研究センター撮影

ポート企画として3つのプログラムが実施され、それらに私は参加しました。その成果は報告書として発表されています。

(a) 文学研究科向け英語による授業に関する FD

このプログラムは、「これから英語による授業を増やしていく段階の研究科向けの汎用性のあるFDプログラムの先行モデルをつくることを目的とする」という触れ込みです(注2)。6回行われたFDで、デモレッスン、ディスカッション、フィードバックを繰り返し行いました。6名の教員が参加し、ファシリテーターとして英語の得意な国際教育連携支援チームコーディネーターがあたり、その他、学内関係スタッフが随時参観しました。各回ごとに個別テーマを設け、討議を通じて深めるとともに、メインとなったのは、いわゆるマイクロティーチングの手法です。講師ジョディ・D・ナイキスト先生(ワシントン大学)を迎え、5分間のデモレッスンを動画撮影し、その後、参加者間でディスカッションを行い、「良い点」「改善点」を6段階評価とコメントでフィードバックし、講師がアドバイスを、というFDの手法を学び、これを利用しました。

私は、膨大なレクチャ・ノートの必要、授業における双方向性の欠如、授業進行方法の不安などを、文学研究科英語FDの成果として、資料の効果的な利用によって解消することを考えました。その際、『大学教員のための教室英語表現』(名古屋大学編)(注

3) という、FDの共通配付資料が非常に役立ちました。これを利用し、生徒役となった教員とのコミュニケーションの訓練、そしてビデオ映像による自分の授業方法の確認を進めたのです。

(b) 「ライデン大学FDプログラム」

文学研究科英語FDとの関連で、全学から私を含む教員15名、スタッフ1名が、ICLON(オランダ、ライデン大学教授法大学院)の英語FDプログラムに参加しました。ライデン大学は、修士課程以上の授業をすべて英語化し、教員・学生の英語(授業)力向上のシステム導入し、ECTS単位互換制度(欧州諸大学間)を推進しており、TIMES紙世界大学ランキングで常に上位に入っていることなどから、研修の場所として選ばれたのです(注4)。

内容は、英語教育・英語FDシステム導入の現状講義、キャンパス全体の英語化促進の現状説明、英語力チェック・トレーニングシステムのデモ・体験、実践的英語ティーチング手法の実演・体験、国際的なクラス運営の手法講義、Webポートフォリオ・iPod・BBCサイト等を利用した英語自学自習手法の実演・体験などです。

ここでも私としては、「英語による授業の準備に時間がかかりすぎる」「学生との双方向性の確保の方法が分からない」という参加動機を持っていました。それに対して、資料の効果的な利用方法、クラスワークの導入、自学自習システムの併用、さらに

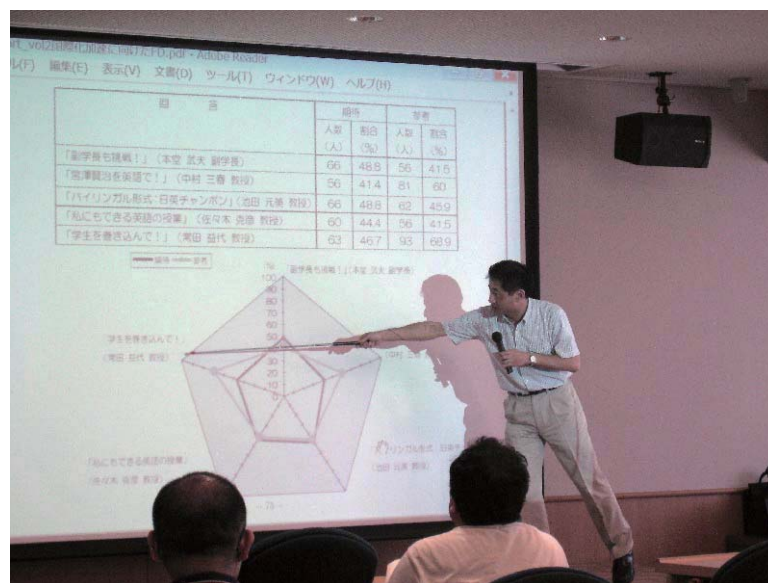


写真2. 名古屋大学高等教育研究センター撮影

ICT を活用したブレンディッド・ラーニングなどが効果的であることを学びました。

(c) 「目指せ！バイリンガル大学」

これは、国際化加速に向けた FD の発表大会で、12 月 1 日、2 日の両日、北大の学内で多くの教職員を集めて行ったものです^(注5)。1 日目は国際化戦略の全般についてのシンポジウム、2 日目は教員 5 人が、生徒役の教員に対してデモレクソンを行いました。私は、「ぬす人」(A Thief) という宮澤賢治の詩を題材として、「Understanding the Metaphor」(比喩を理解する) というデモレクソンを行いました。文学作品の場合、翻訳の難しさの問題があり、自分で作品を翻訳して資料を作成しました。また、双方向性を実現するために、穴埋め資料を用いたクラスワークを導入し、スライドもそれに留意して併用しました。さらに、呼びかけなどの口頭コミュニケーションも、『教室英語表現』などを参考に工夫しました。ただやるだけではなく、短時間ではあっても、学問的に一定水準を確保するために、比喩の本質に迫る内容を盛り込みました。

2.3 日本文学を英語で！……何が課題か

まとめますと、教員の英語力は当然必要なのですが、日本関係の教員が非常に流暢な英語を話すことは、受講者も求めないと思われます。せめて教室英語表現を身につけることが大事です。また、同じ理由から、lecture note も活用しつつ、呼びかけ・発問などのコミュニケーションに留意して双方向的な授業を構築すること、そのためには資料やクラスワーク等を活用して、作業をさせることです。何もかも教員がやろうと考えるから、英語のできない教員はパニックになるのです。自学自習の要素も盛り込んでよいわけです。内容的には、日本文学の発想の異質な部分に注意すれば、学生を惹きつけられる

ものと思います。以上、私のお話で、皆さんが自信をつけてくだされば幸いです。

3. セミナーに参加して

質疑応答で、英語 FD は通常の FD と共通する部分が多く、これによって逆に日本語の授業改善にも繋がるという意見などが出された。英語による授業の先進大学においても、日本関係の教員が提供している科目はまだ少ないと聞く。今回のセミナーへの参加は、そのような現状の認識と、今後の方策について思いを新たにできる機会となった。また、質疑では教員に対するサポート体制の充実が必要との声もあった。私が参加した英語 FD 全般を通じて、国際教育連携のスタッフの並々ならぬ尽力があり、それには感謝したい。今後、サポート体制の継続・拡充も急務であるということを付言したい。

注

1. 同セミナーちらし・ホームページによる。名古屋大学国際化拠点整備事業教授法研修「専門を英語で教える」

(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/te/>)

2. 『文学研究科向け英語による授業に関する FD 報告書』(北海道大学, 2010)

3. 『大学教員のための教室英語表現 300』(中井俊樹編, アルク, 2008)。姉妹書に『大学生のための教室英語表現 300』(同, 2009) もある。

4. 『ライデン大学 FD プログラム報告書』(北海道大学, 2010)

5. 『国際化加速に向けた FD 一瞥せ！バイリンガル大学一報告書』(北海道大学, 2010)

名古屋大学国際化拠点整備事業教授法研修「専門を英語で教える」における講演 PPT

名古屋大学国際化拠点整備事業教授法研修 専門を英語で教える

宮澤賢治を英語で！ FD苦闘記北海道大学大学院 文学研究科
中村三春

☆お話の成り立ち

- ① なぜ私が！？.....英語FDとのなれそめ
- ② 北大英語FD2009
 - a. 文学研究科英語による授業FD
 - b. ライデン大学プログラム
 - c. 目指せ！パイリಂಗガル大学～デモレッシン
- ③ 日本文学を英語で！.....何が課題か

2

① 英語による授業との関わり

- ◆私の専門：日本文学（比較文学・表象文化論）
 - 有島武郎、宮澤賢治、横光利一、太宰治らの研究
 - その他文芸理論等の研究
- ◆山形大学YU-SUNYプロジェクト（2006～）
 - SUNY（NY州立大学機構）との提携を期に、授業内容をオンライン配信し、単位互換を実施する。
 - JAPAN STUDIES PROGRAM
 - ▶文系・理系を併せて10科目程度を目標
 - ▶教養教育向け対面授業としても提供
 - 「宮澤賢治から村上春樹まで」を英語で！

3

② 大学教育の国際化加速プログラム

- ◆北海道大学赴任（2008.10）
 - 2009年度グローバル30不採用
 - ▶全学的国際化推進の機運
- ◆平成20年度採択・文部科学省大学改革推進等補助金事業「大学教育の国際化加速プログラム（国際共同・連携支援（総合戦略型））」
 - 海外の大学との単位互換
 - ダブルディグリー・プログラム
 - エラスムス・ムンドゥスプログラムの推進
 - 英語による授業を充実するための教員サポート

4

a. 文学研究科向け英語による授業FD

- ◆これから英語による授業を増やしていく段階の研究科向けの汎用性のあるFDプログラムの先行モデルをつくることを目的とする。
- 活発で積極的なディスカッションを通し、英語による授業に対する共通認識の形成を図り、授業改善に資する。
 - ▶参加者にはすでに英語による授業を体系的に行っている研究科を主な対象とするFDプログラム（企画）や報告会などにも積極的に参加し、本学での英語による授業推進のために積極的に関わっていくことが期待される。

5

☆プログラム概要

- ◆1回1.5～2時間、全6回
 - ▶6月24日（水） 8月4日（火） 9月28日（月）
 - ▶11月19日（木） 1月26日（火） 2月24日（水）
- ◆オリエンテーション、デモレッシン、ディスカッション、フィードバック（レポート）を繰り返す
 - 6名参加（社会学1、哲学1、倫理学2、日本文学1）
 - ▶ファシリテーター：国際教育連携支援チームコーディネーター
 - ▶その他、学内関係スタッフが随時参加

6

☆各回ごとの個別テーマ

- ① 建設的な評価について (Constructive feedback)
- ② 英語力のレベルが異なる学生が混ざったクラスを教えることについて
- ③ 英語が母国語ではない教員が英語で教えることについて
- ④ 英語が母国語ではない学生に英語で教えることについて
- ⑤ 英語力のレベルが異なる学生が混ざったクラスを教えることについて

7

☆マイクロティーチング

◆特別回マイクロティーチングワークショップ

- 7月29日・講師ジョディ・D・ナイキスト先生
(ワシントン大学)

◆5分間のデモレッスンを動画撮影

- デモレッスン後、参加者間でディスカッション
- 「良い点」「改善点」を6段階評価とコメントでフィードバック



▶講師がアドバイス

8

☆宮澤賢治を英語で！

◆山形大YU-SUNYプロジェクトの段階

- 膨大なレクチャ・ノートの準備(200ページ！?)
- 一方的「講義」(朗読！?)
- 双方向性の欠如(英語でやり取りができない)
- 英語による授業進行方法の不安(知らない)

◆文学研究科英語FDの成果

- 資料の効果的な利用
- 便利な共通配付資料(名古屋大学編)！
- 生徒役教員とのコミュニケーションの訓練
- ビデオ映像による自己確認

9

☆大学教員(大学生)のための.....



10

b. ライデン大学FDプログラム

◆ICLON(オランダ、ライデン大学教育学大学院)の英語FDプログラムへの参加

- 全学より教員15名、スタッフ1名
▶うち文学研究科4名
- 8月24日～28日(23日出発、30日帰国)

◆ライデン大学・デルフト工科大学

- 修士課程以上の授業をすべて英語化
▶教員・学生の英語(授業)力向上のシステム導入
- ECTS単位互換制度(欧州諸大学間)
- TIMES紙大学世界ランキングで常に上位

11

☆ライデン大学FDプログラム概要

- ① 英語教育・英語FDシステム導入の現状講義
- ② キャンパス全体の英語化促進の現状説明
- ③ 英語力チェック・トレーニングシステムのデモ・体験
- ④ 実践的英語ティーチング手法の実演・体験
- ⑤ 国際的なクラス運営の手法講義
- ⑥ Webポートフォリオ・iPod・BBCサイト等を利用した英語自学自習手法の実演・体験
 - デルフト工科大学見学
 - シーボルト記念館見学

12

☆ライデン大学で学んだこと

◆「英語による授業の準備に時間がかかりすぎる」
「学生との双方向性の確保の方法が分からない」と
の参加動機



- ① 資料の効果的な利用方法
- ② クラスワークの導入
- ③ 自学自習システムの併用
- ④ ブレンディッド・ラーニング

13

c. 目指せ！ バイリンガル大学

◆国際化加速に向けたFD発表大会

- 12月1日 オランダの大学に学ぶ北大の国際化戦略(209名参加)
 - ▶ライデン大学・デルフト工科大学FDプログラム報告(プログラム参加教員)
 - ▶パネルディスカッション「本学の国際化戦略の課題と目標」(副学長等)
- 12月2日 やってみよう！ 英語での授業(174名参加)
 - ▶マイクロティーチング説明
 - ▶デモレッスン(教員5名)

14

☆デモレッスン「比喻を理解する」

◆「宮澤賢治を英語で！」の集大成(のつもり)

- ① 自作テキストの用意
- ② 翻訳(文芸・詩)の難しさの問題
- ③ 双方向性の実現
 - ▶資料を用いたクラスワークの導入
 - ▶スライド資料の併用
 - ▶口頭でのコミュニケーション(呼びかけ)
- ④ 学問的に一定水準を確保

15

③ 日本文学を英語で！……何が課題か

- ① 教員の英語力
 - 「教室英語表現」を身につける
 - レクチャ・ノートを活用
- ② 学生の理解力
 - 「日本文学の発想の異質な部分」に注意
 - 呼びかけ、発問などのコミュニケーションに留意
- ③ 双方向的な授業へ
 - 資料、クラスワーク等を活用(作業をさせる)
 - 自学自習の要素(ホームワーク)を確保

16